
サクラサク

子谷 朋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラサク

【Nコード】

N8907H

【作者名】

子谷 朋

【あらすじ】

『君のことは忘れない―…』雲雀恭弥と少女の出会いには必然的かつ偶然のものだった―…

桜咲く春の出会い。

もう君は覚えてなんかいないだろう。
すごく短くて、すごく微妙な出会いだったから。

「雲雀さん！待ってください！！」

後ろから、沢田 綱吉の声がした。

けど、無視だ。

僕は草食動物なんて、大嫌いだから。

僕は雲雀 恭弥。

並盛中最強の風紀委員長。

並盛で僕に敵うヤツなんていない……

最近までそう思っていたのに、赤ん坊を見つけてしまった。

僕の体が嬉しさで震えた。

僕ほどの力のヤツなんて周りにいなかったから。

強いヤツは好き。

倒す時の快感がたまらない。

弱いヤツは嫌い。

倒しがいい無さすぎだから。

フワッ……

突然甘い香りがした。

何処からともなく匂った。

甘い匂いは嫌いなハズなのに、その匂いは大丈夫だった。
ドンっ…

そんなコトを思っていたら何かにぶつかった。

そしてはっと我に返る。

「わ、ごめんっ！」

少し高めの女の声がした。

女は慌てて僕が落とした鞆を拾う。

僕のコトを知っていて、恐れているのだろうか？

それなら、正直イラつく。

「ホンットごめん！！大丈夫？怪我してない？」

けど、女の話し方からして、僕と同等に話している気がする。

なら、僕の勘違いか。

にしても、並盛の地で僕を知らないなんて珍しい。

「少年？」

ずっと黙ってしゃがみこんでいたものだから、女に顔を覗かれた。

女のお金が頬に当たってくすぐったい。

「大丈夫だよ。心配しないで。」

だから顔をそらした。

なんだか体が熱い。

息も少し上がっている。

「それ、貸して。僕こそぶつかって、ご……め……………」

立ち上がった時、クラッと目眩がした。

そして頭も痛くて……

そうだ、頭が痛くて保健室に行ったけど、沢田 綱吉が居たから家に帰ろうとしたんだ…。

激しい頭痛に襲われて、僕は気を失った。

『はあー？何コイツ？何処で拾って来たの？』

『馬鹿、熱だしてるの。』

『何で永遠が面倒見るワケ？』

『何となく…。』

遠くでそんな会話が聞こえた。

永遠、永遠――

僕にぶつかった女の名。

きつと君を見つけたですよ。

そして――

ありがとうをいうから。

「……………!!」

目が覚めると、僕に関係が深い病院のベッドに寝ていた。

さっきまでの夢？

なら、誰が此処まで僕を運んだのだろうか？

カサッ……………

胸元で紙が擦れる音がした。

不審に思って胸ポケットを探ると、入れ覚えのない紙切れが入っていた。

慌てて紙切れを開く。

「少年、熱下がったかな？

無理しちや駄目だよ。

念のため熱を下げる薬飲ませたから、熱は下がっているハズなんだけど。

ま、安静にね。」

走り書きだったものの、あのぶつかった女の名だとわかった。

「…面白いね。」

強いヤツを見つけた時とは違う快感が体を走る。

永遠――

不思議な女……。

「何してんの？恭弥？」

今、永遠は僕の隣に居る。

あれから、3ヶ月が経っていた。

不思議なコトにも永遠からこちらに出向いて来たのだ。

永遠はあの時のコトを覚えていないようだ。

でも、別に構わない。

僕はちゃんと借りは返した。

それだけで十分だから。

「ねー恭弥？」

永遠の金髪が僕の頬に当たった。

やっぱり永遠の髪はくすぐりたい。

「黙ってなよ。」

そつと永遠の金髪を掴んで自分の方へ引き寄せる。

「……………」

顔を赤く染める永遠。

あの時は永遠の方が僕より上だったけど今は絶対僕の方が上だ。
だって、僕らは出会ったのだから。

君に出会ってしまったから、今の僕が居る。

だから――君は僕の為に存在して。

拒否権は――ないよ。

（後書き）

さて…長々と読んで頂きありがとうございました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8907h/>

サクラサク

2010年10月10日19時20分発行